后日記等一二を除いては、その大部分が今日なお未刊のものであり、われわれは今後ただこの新要録によつてその一部を利用しうることとなつたわけである。偶〻寓目するところに就いてほんの一例を挙げれば、清滝宮猿楽に關聯して引用されている隆源僧正日記の如きは満済准后記と併せて応永年間の観世猿楽（特に世阿弥とその子元清）に關する最も正確な知識の根源となるべきものであろう（その方面の研究者には夙に知られているところでもあろうが）。現存醍醐の諸伽藍の建築や仏像、絵画等の由緒、伝来についても本書に引用された諸史料が重要な徴証となるべきところが少なくなく、ひいて本書の出版が今後広くわが古文化財の研究の上に大いに役立つであろうことは疑なきところである。終りに京都府教育委員会が今後も引きつづきこの種の好史料の出版を継続せられ旧社寺課以来古文化財の調査と保護の上に常に指導的な役割を果されて来たそのかがやかしい伝統を一層光輝あらしめられんことを期待して已まない。（全三冊、A5版、一、三三二頁、図版八葉、京都府教育委員会発行）

——柴田　実——

J. G. D. Clark, Prehistoric Europe
——The Economic Basis——
Methuen, London 1952

先史考古学と先史学とは必らずしも同義語ではない。何故かならばその名称からして一は Archaeology であり、他は Prehistory であるからである。しかし先史考古学、先史学それに先史地理学というもその資料には共通のものが多く、ただ研究目的や学問の系譜が夫々に異るといえばよいであろうか。先史学は歴史学と地史学との中間に位置するむしろ先史時代に關する総合的な学問であるのに対して、考古学の一分科である先史考古学においては、何よりもまず遺物遺跡、しかも土器、石器その他いわゆる人工遺物の正確なる記述がその直接の研究領域になる。同様に先史地理学にあつては地域が問題になる。これに対して先史学では、これらのすべてを総括した先史時代の文化が問題にされるのである。その限りにおいて考古学が主とする人工遺物や遺跡は勿論のこと、地理学者や地史学者の問題にする環境や、人類学者が主として取扱う化石人類等に關することの一通りは知つておかなければならない。

本書の著者は元来オックスフォード大学に育つた先史考古学者であるが、その学風にはイギリスの伝統ともいうべき先史学的傾向が強い。また中石器時代や北欧後氷期文化の専門家として名高く、その論著には The Mesolithic Settlement in Northern Europe—A Study of the Food Gathering Peoples of Northern Europe during the Early Post-Glacial Period—1986 等すぐれた先史地理学的なものがある。

—本書の紹介は当時藤岡が雑誌の「考古学」（八—四、昭和十二年）に発表—。

本書は表題のごとくヨーロッパの先史時代人の経済生活を、主として現実の遺物、遺跡を主なる資料として論じたものである。ただその場合従来の考古学的編年順的な記述をとることなく経済段階に従つて徐々に論が進められ、しかも無言の遺物遺跡をして、出来る限りその社会や経済生活を語らしめんと努力されている点が注目を引く。章を分つこと一〇、その間二章以下において低次の採集、収得経済の段階から初期農耕に及び、ついで耕地、穀物、家畜にふれ、さらに人類の集落や家屋の形態を論じ、また文化人類学者が問題にする遺物のテクノロジーに關する事項を実

験的に検討し最後に物及び人の移動を語る交易と交通の項をもつて結んでいる。その叙述に当つては、出来るだけ多くの既発表の研究や出土遺物の考察を基礎にして帰納的に論を進めている。またその序文にもみられるように、従来自らが見聞し得なかつたヨーロッパ各地の遺物や遺跡を見学しえた喜びが本書を完成せしめたものと考えられる。

さて著者の立場は第一章の Ecological Zones and Economic Stages にみられるごとく、先史社会の経済の理解には文化(Culture)と生物環境(Biome)、それに土壌や気候等の自然的環境(Habitat)なる三者の併行的関連性の認識が必要であることを解く。未開社会を論じる文化人類学的な考え方を先史時代の場合にもあてはめんとするのであるが、その場合先史時代には生活の変化、つまり時間的発展が急速であり、しばしばこの併行関係を破る場合が多いこと、しかも一方間もなく再びもとの併行性を求めんとする傾向になるというのである。かかる中に環境の変化をとき、文化の諸相を理解せんとするのであつて、ヨーロッパにおける北欧と南欧との文化の時間的ずれが最初に図示し説明されている。ついで早くも本論に入り最初にまず採集、収得経済を説明するにあたりこれを大きくは内陸の場合と外洋の場合とについて二分し、主として捕獲物の種類別に、その分布、環境との関係、道具等を問題にし、これを時代順に下るといつた方法をもつて全章を貫いている。

例えば後期旧石器時代の Hunter-Fishers を論じるに当つては西欧におけるマグダレニアン期の諸遺跡、北ドイツではハンブルグ及びアーレンスブルグその他の著名遺跡をあげ、狩猟の対象となつた馴鹿の分布、その種類、現存エスキモとの生活の類似等を取り上げる。またここで骨鉢が問題になり弓矢の使用問題が論じられる。かくて北阿のカプシアンの岩壁絵画が例証される。ついで中石器時代に入るとスペインのアルペラの婦人が木にのぼりはちの巣をつついてはちに見舞われる壁画からはじめて、バルト海での豊富な漁猟生活や鳥類の捕獲が取り上げられる。この場合でもまた細石器や骨製の釣針、三叉の釵の分布が具体的に検討される。ついで外海にあつては鯨やイルカ・アザラシ等の骨が問題となり、馴鹿の場合と同様、Biome すなわちその生物の習性や環境に必ず一度はふれるところに本書の特色がある。すなわちこれらの海棲動物は、その遺骸が海浜に波で打ち上げられるから、直ちにその遺骨の分布を云々すべきでないことや、親をさきに殺してその子供を氷上に孤立させること等、捕獲等の技術的な面と、またこの種動物の捕獲は石器時代以後青銅器時代、鉄器時代を通じて北欧一帯にみられたことを述べる。

第四、第五の農耕の章においても同様な記述がとられる。農業の北限はどこか、ダニューブ流域の新石器時代の遺跡が川沿いのレス(黄土)上に分布が多いこと等土壌との関係、その他定着農業に伴う農耕具の問題、壁画にみられる鉤状に曲つた木製の鋤等を例証し、ついで家畜や栽培せられていた穀物の種類をのべる。例えば小麦や大麦の新石器時代以後鉄器時代までのデンマーク及びイギリスでの出土数等を比較する。フリント製の石鎌や後の鉄鎌が解説される。家畜においても同様である。第六章の集落及び家にあつては、旧石器時代の洞窟から始められて、野外住居や、夏の家、冬の家が問題にされ、ついで湖畔集落や湖上住居、最後に竪穴の平面形態からする家屋の想像復原が試みられる。この間後の

時代になるとクリートのもの等も例にあげられるが、著者自身の住居の系統論はみられない。ただこの章にあつては従来の書物にはあまりしられない北欧やイギリスにおける鉄器時代の密集した住居趾が例証され説明されている。第七、八のテクノロジーの章は、主として原料別の解説が行われ、石器の製作から始められて、冶金術に及び、その間鋳型の分布や、原料や製品の分布等も論じられて、第九章の交易に關聯する。フリントマインの遺跡が取上げられ、中でも中央の仕事場から通路が派出したノーフォーク州のグリムス・グレーブ遺跡等、イギリスの例が詳しく紹介されているのは興味が深い。また銅鉱に關してはオーストリアの遺跡等に例をあげて、そのかまや、先史時代における銅の製錬の様子が想像され示されている。このテクノロジーの課題はその他土器や皮革製品、身体装飾品、網、織物等の一般日常品にも及んでいる。最後の九、一〇章が交易並びに交通路に関する事項である。ここでまた著者はエスキモがソープ・ストンを求めて遠距離を移動する例等をあげて先史時代にあてはめ、装身具としての東地中海産の貝類たる海菊貝が、ダニューブ、ラインの内陸幹線に分布する事実をあげて交易や交通を考える。また石器時代においては石材と原産地が問題にされ、フリントの石切場や石斧製造遺跡がスカンジナヴィア等従来注意されなかつたイギリス以外の地域にも見られることを強調する。また交通の章ではこれを水上と陸上交通とに二大別し、前者の場合では舟が、後者の場合では車が問題にされる。かつて同じオックスフォード学派ともいうべきクロフォードが主として道路といつた遺跡の検出を取り上げたのと反対に、ここでは遺物、すなわち交通機関が問題にされるのである。

本文三四九頁、それにB五版であるからB六版にすれば数百頁の大冊であり、およそ先史時代人の生活復原を考える場合のヨーロッパの資料は本書に殆んど網羅され、一度は例証されているといつてよい。いわば本書は戦後出版のヨーロッパの先史文化や経済を論じる場合には一度は誰もが眼を通すべき専門的材料による概説書である。ただ著者がはじめにも述べたように元来先史学ないしは先史考古学的基礎の上にたち、しかも自然的環境の変化に富む北欧の後氷期文化をその主要な研究対象としているだけに、その経済史観があくまで、環境論的であり、生態学的でありすぎるといつたことである。これはわれわれ地理学徒には極めて便宜であり、本書をあえて筆者が紹介した所以であるが、経済史を論じ、ヨーロッパの先史文化を近東やエーゲ海等の古典文化との関係から論じんとする一般歴史家や古典考古学者の眼からみれば或はどうであろうか。その答えは評者の容易になしうるところではなく、また表題があまりに大きすぎるために、全章を通じて著者自身のオリジナリティが少いことは、最初の方法論自身の中にも読みとることが出来る。しかしこれらはあまりにも各自の研究領域が狭隘すぎるわれわれ日本人のひがみであろうか。それはともかく少くも各章毎に二〇〇にもあまる引用文献が示されていることや、先人の研究が本書中にうまく織り込まれていること等はその豊富な挿図や図版の蒐集と共に、著者の永年にわたる努力の結果であることを知らしめ、かのメンギンの石器時代の世界史以来近年稀にみる野心的なヨーロッパ先史学の概説書であることをおもわしめる。而してこれはまた著者自身が最初に本書を「若き世代の先史学徒へ」と題していることからも知ることが出来る。（定價六〇セント、邦貨三、三〇〇圓）

——藤岡謙二郎——